

神道六教派特立百三十年記念事業 公開シンポジウム

「二十一世紀の教派神道―百三十年を踏みしめて―」

パネリスト講演 パネルディスカッション

平成二十四年六月五日（火）
於 國學院大學 常磐松ホール

司会 お時間でございますので「神道六教派特立百三十年記念事業 公開シンポジウム」を再開致します。

只今からは、先ほど基調講演をいただきました井上順孝教授をコーディネーターと致しまして、芳村正徳神習教教主、村鳥邦夫御嶽教管長のお二方をパネリストと致しまして、ご登壇いただきます。

まず、パネリストのお二方に二十分づつご講演をいただきまして、続いてお三方でディスカッションをしていただきます。

【パネリスト講演】……………神習教 芳村正徳 教主

司会 それでは、パネリストにご講演して頂きます。

神習教 芳村正徳教主より「教派神道と人生儀礼」と題してご講演戴きます。

芳村先生は、神習教三世管長、初代教主でございます。現代社会の中で人々の目線に立った布教を目指しておられます。芳村先生、お願い致します。

芳村 ただいま御紹介いただきました神習教の芳村でございます。時間が十分にあるわけではないので、十分なお話ができるかどうかは分かりませんが、私の考える布教をここでご紹介させていただきたいと思えます。

私のテーマといたしましては、「教派神道と人生儀礼」ということです。人生儀礼に行く前に、人々に神道信仰の種をしっかりと蒔いて、生涯を通して日本の神々への信仰によって善導していく、教導していくというのは私どもの使命でございます。しかしながら、こういう世の中になりますと、いかにして人々との接点をつくっていくのか。そして、そこでいかにしてその人たちに信仰の種を蒔いていくのかということとは、重要な課題となっております。

昨今、先ほど井上先生のお話にもありましたけれども、パワースポットが流行っております。パワースポット巡りをしている方も非常に多いように思います。朝出勤めをして社頭に行きますと、神殿の前で妙な動きをしている方がいらっしゃるんです。何かというと、パワースポットに来て、パワーをもらおうということと、どこで覚えたのか知りませんが、体操のようなことをしていたり。伊勢神宮の宇治橋でパワーをもらうために日の出を拝もうという方も殺到したという話も聞きます。

一方では、なかなかよいご縁に恵まれない方がいらっしゃるようで、婚活が盛んに行われています。これは面白い噂ですが、どこどの神社のどここの授与所の何番目の窓口でこれこれこの携帯ストラップを買おうとよい縁に結ばれるということがまことしやかに噂として流れている。先ほど井上先生もおっしゃったように、神道にかかわっているわれわれ白い着物を着ている人間の価値観とは全く違うところにあつて、違うことをやっている。しかし、そういう人たちはせっかくだらっしゃるわけですから、よい方向に導き、また接点をきちんとつなげていくことは非常に重要ではないかと思えます。

今回、私は人生儀礼ということテーマを選んだわけです。まず神葬祭と結婚式、日々のご祈願というようなかたちで、大きく三つに分けて話をすすめたいと思います。神葬祭は、江戸時代にはほとんど認められていなかったもので、現代でも9割が仏教のご葬儀。神道や神社、キリスト教は一割程度です。仏教でも、菩提寺離れが進んでいると聞きます。つまり、非常に高額なお布施を請求されたり、定期的に寄附を出さなければいけないというところに対して、人々は価値を見いださなくなっているということでしょう。そういうことで、菩提寺離れが進んでいます。

そういうことがある中で直葬、宗教的な行事を行わないで亡くなった方をおくつてしまふとか、自然葬などは宗教者としては広まっていくべきではないと考えるわけです。そういう中で、私たち神道家としてしっかりと神道による神葬祭を行っていかなければならぬと考えております。

明治十五年、内務省が神宮、官国幣社の神官は葬儀に係せざるものとするという通達を出してから要望があつて、神葬祭を、例えば皇族の方や有名神社の宮司さんの神葬祭を行ってきたのは、教派ですね。ここで教派の神葬祭を紹介させていただきたいと思えます。

葬祭の副次的な目的としまして、遺族が死を受け入れるとか、社会的にもいろいろな意義があります。しかしながら、主たる目的は死者の霊魂が鎮まるということとす。すべての教派というわけではないんですけれども、いくつかの教派で独自の祭式を神葬祭の中で

行っています。独自の祭式の代表的なものが、死者の御霊に対して「あなたは亡くなった後で、死後の世界としてこういう場所にこのようにして導かれていきなさい。そして、安定をしなさい」という、靈魂の安定を促す言葉を各教派、祭詞の中で取り入れております。

私どもの神習教では、遷霊のときにそういった特別な言葉を申し上げることはないんですが、祭詞の中で「あなたは死をしっかりと受け入れて、もともと幽世の掟に従って、あなたの御霊はこういうふうに戻るところに帰る。霊はこういうかたちでとどまって、天津神のもとでしっかりと修行して、そこには私どもの教祖の導きが当然あって、ゆくゆくは子孫たちの祭りをしっかりと受けて国津神となってください」といったことを祭詞の中で申し上げております。お隣にいらっしゃいます村鳥先生の御嶽教では、靈魂安鎮の言葉を祭式の中で故人に向かって申し上げることをしていらっしゃいます。

出雲大社教では戒論文、同時に靈魂安定詞を御霊様に対して、また遺族に対して申し上げます。

扶桑教では、戒論文、大和よみをして「みさとしぶみ」を御霊様に申し上げます。禊教は、高天原の神々として井上正鐵神がしっかりと導いていくので、しっかりと安定してくださいというような靈魂安定詞を故人の御霊に向かってよんでおります。

神理教でも、同じように靈魂安定詞をよまれ、事あるごとに霊前告詞、棺に向かって言葉をかけるといふものです。通常の祝詞の四倍ぐらいの長さがあるようです。こういったことを、各教派で行っております。

私どもは形式ではなく、亡くなった御霊様、恐らく葬儀のときもその靈魂は近くにいるはずです。その御霊に対して、「迷わず、しっかりと幽世に赴いてください。同時に安定してください」さらに、子孫たちにはその後の祖霊祭祀をしっかりと奨励するといった効果を期してこういったことをやっているわけです。これが神葬祭でございます。

次に、全く正反対の吉礼で、結婚式に移ってみたいと思います。これは先ほど皆さんにご紹介したものです。

結婚式は、各教派の事例はここでは紹介できませんが、現在の結婚式の原型は、もしかしたら誤りがあるかもしれませんが、大正天皇の御成婚のときに神社での結婚式を奨励しようということ、東京大神宮が中心となって祭式をつくって、日本中に広められた。

私どもの神習教でも同時期に結婚式の祭式をつくって、結婚式を奨励してきております。最近は一生涯に一度ではない方も多くなってきているようでございますけれども、私どもでは簡素化とは全く反対の方向に、豪華とは言いませんけれども、せっかくの一生に一度の結婚式ですから重厚に、しっかりと思い出に残るようにということ、日々考えて執行しております。ホテルでやりますと二十分という非常に短い時間の結婚式ですけれども、私どもはきちっとしたかたちでやりますと大体四十五分から五十分ぐらいかかります。

祭式としましては、例えば天の御柱巡りを行います。これは神典と言いますか、古事記、日本書紀に伊弉諾尊、伊弉冉尊が天の御柱の回りを右巡り左巡りをして、そこで巡り逢っ

てみとのまぐわいをするという故実にのっとったものがございます。

もう一つ、神訓も申し上げております。これは新郎・新婦、ご家族、舅・姑さんに対して、「結婚とはこういうものだから、みんな仲良くやってください」と。これは現在でもしっかり時間を取って、皆さんの前で読み上げております。

三三九度と書きましたが、どこの結婚式でもやっております。しかし、一の盃から三の盃まで、例えば一の盃は新郎・新婦・新郎、二の盃は新婦・新郎・新婦、三の盃は一の盃と同じように新郎・新婦・新郎と、結婚式が始まる前にご新婦に「全部召し上がって、酔っ払ってしまわないように」と一言声をかけております。昔ながらのかたちをしっかりと残すということ、三三九度もそういうかたちでやっております。

賀辞、がじというただのお祝いの言葉ですけれども、お祝いの言葉ではございません。当然お祝いの言葉を申しますが、先ほどの神葬祭と同じように、「神葬祭では靈魂はこういうもので、死後の世界はこういうものである」と、しっかりとお伝えしております。結婚式でも、「伊弉諾尊・伊弉冉尊という神様はこういう神様でいらっしやって、古典にこういうことが書かれている。これが日本の神々の結婚の起源であって、それにのっとって、神習って日本人は結婚式をあげてきたから、神にならって素晴らしい家庭を築いてください」という話に結ぶわけでございます。そういったかたちで神道の信仰的な面、神々のいろいろなお徳でありますといったこともご祭儀に際し説くことをしっかりと意識してやっております。

次に日々のご祈願ですが、日々のご祈願の中には、人生儀礼が多いわけです。私たちがご祈願を行うに当たり、特に注意している点をいくつか。ここ何年ぐらいでしょうか、権威的な人や権威的な組織に対する人々の目は、非常に厳しくなっております。ちよつとミスをするといろいろなご批判を受けたり、「あそこはあんなものか」というようなことになるわけです。特に神社、または私どものようなところにお見えになる方が来たときよりもお帰りになるときにますますがしく、気持ちよくなっていた。これは祭式を通してのみではなく、接する私たちが気をつけなければいけない。例えば初詣のとき、新年に神様にお参りして、「今年一年、よい年にしましょう」と思ったけれども、巫女さんや神主さんの態度が横柄で気分が悪くなって帰って、せっかくお参りに来たのはどうかというのにはあつてはならないわけです。お参りの際の接遇に、十分に配慮して行うように気をつけております。

かただけで心がこもっていない、理由の分からない高額な玉串料やお布施、受け手の要望を叶えられないことに対して非常にシビアと書いております。今の人々の目は厳しいというお話をしましたけれども、何しろお参りする方は従来のお祭りの意味と若干違うかたちでお参りに行くという行為を考えていらっしやるところがあると思っております。同時に、個人化が進んでおります。例えば初宮や七五三に関していえば、少子化が進んでおりますので、何しろ贅沢に昔ながらのかたちには則ってやろうと。七五三では、「十一月十五日に集まってください。またはその直近の土日に集まってください」と言っても、皆さ

んはサラリーマンですから、なかなか集まらないわけですね。「早目に予約をさせてください」と、9月下旬から七五三をやりたいという方もいらっしやいます。

待ってますと、母方・父方両方のおじいちゃん、おばあちゃんの四人が来るわけですね。お父さんとお母さんが来て、さらにお父さんとお母さんの兄弟まで来ます。一グループで十人ということもあります。皆さんは何を期待しているかというのと、七五三を迎える子供が一人で立派にきれいな衣装を着て、ご神前の前に立って、「お父さん、お母さん、どうしたらいいか分からない」と言いながらも玉串をあげて、「よくできたね」ということを期待しているわけですね。その後にお食事を食べたり、家族の中では相当大きな行事となっています。

そういったことにも、ある程度は応えてあげなければいけない。それに際して、大事なお子さんの七五三なり初宮ということになりますと、私たちがしつかり心を込めて、親御さんと同じような立場でお子さんの成長を祈ってあげなければ、相互の信頼関係が築けなくなっております。

私が日ごろ考えておりますのは、宗教サイドの価値観を「本来、これはこういうものである」「プロが言っているんだから、これに従いなさい」ではなく、受け手の個別の事情を考慮しながらしつかり対応する。ポイントは個別性や多様性、本来あるべき姿と異なりますか、重厚さ、または独自性ではないかと思えます。

先ほど申し上げましたように、パワースポットや噂、御朱印帳を持ってあちこち回るというような方が非常に増えております。こういう時代だからこそ人々も不安を抱え、宗教らしきものの近くに寄っていくと思います。その宗教らしきものの近くに寄ってきた人をしつかりとよい方向に導いてさしあげるといことは、私たち宗教者にとって非常に重要なことだと思っております。

非常に簡単ではございましたが、私どもが日ごろ考えていることや活動を紹介させていただきますました。ご清聴、ありがとうございます。

司会 芳村先生有難うございました。

【パネリスト講演】……………御嶽教 村鳥邦夫 管長

司会 続いて、御嶽教 村鳥邦夫管長より「教派神道と自然崇拜」と題してご講演戴きます。

村鳥先生は、御嶽教第十二代管長でございまして、多彩な人生経験を基に宗教相談、人生相談に力を注いでおられます。村鳥先生、お願い致します。

村鳥 御紹介いただきました御嶽教の村鳥でございまして。私どもは木曾の御嶽山を信仰の根本道場とする山岳宗教系の教派神道でございまして。今から山岳宗教をある程度ご理解い

ただくことにおきまして、過去の成り立ちや現在、さらに将来は山岳信仰としてどのような歩みを考えているかについて、少し触れさせていただきたいと思えます。

まず、日本の霊山について簡単にご説明させていただきます。今日は全国津々浦々からお集まりの方もおられると思えますし、各地からのご出身の方もおられると思えますので、北から代表的な霊山や信仰の山と言われまますところをご紹介させていただきます。もちろん、皆様は既にご高承と存じますので、簡単に触れさせていただきます。

恐山は、青森県下北半島にあります。死者の靈魂が集まる山とされておりあります。イタコの口寄せで有名なところです。

月山・羽黒山・湯殿山の3つを合わせて出羽三山と申します。山形県にある山です。奥羽三山とも言われており、羽黒派の修験道が盛んで、峰入りも盛んに行われているところです。

男体山は、栃木県日光山の主峰でございます。

大山は丹沢山地、神奈川県北西部と山梨県、静岡県にまたがっている山で、相模大山と言われております。昔から雨乞い祈祷が盛んに行われ、豊作祈願の信仰で有名なところでございます。

富士山は皆様方はご高承と思えますけれども、江戸時代に角行者様、身祿行者様が出られまして、富士講を広められました。明治初年に現在教派神道一派であります扶桑教、宍野半師が尽力され、また實行教は柴田花守師がその教えを説いて教派神道として結集をいたしました。

御嶽山は、後で触れさせていただきます。

白山は石川県、岐阜県の両県にまたがっている山です。越前の行者泰澄によりまして、開山されました。白山信仰で有名なところでございます。

立山連邦は、黒部ダムまで行きますとよくごらんいただけると思えます。富山県南東部に位置します。浄土信仰、地獄信仰に関係がございまして、連峰と言うわけですので山がいくつもあります。そのうちの雄山を、山頂の浄土としての立山信仰が形成されたところでは、九世紀ごろから修験者の登拝が始まりまして、立山禪定という言葉が残っているほどです。

比叡山は伝教大師、いわゆる最澄様が開山されました。京都の表鬼門に当たるといふ方に延暦寺が建立されています。

大和の三輪山、奈良県の大和盆地にあります。三諸の神奈備という言葉が有名でございます。山そのものがご神体になっておりまして、本殿はございません。拝殿のみでございます。

吉野の大峰山、役小角の修行の地でございます。いわゆる、修験道の開祖でございます。蔵王大権現を桜の木に彫刻したというところから、桜がご神木としてたくさん植林されました。桜の名所ソメイヨシノとして、現在桜の名所になっているわけです。奥駈け修行は、テレビ等で時々放映されておりますけれども、西の覗き、東の覗きと言いまして、崖の頂

上からロープで体を縛って、上半身あるいはそれ以上乗り出して反省をすることが盛んに行われております。

高野山は、真言密教の聖地でございます。弘法大師空海様によりまして、開山された金剛峯寺のあるところです。

伯耆大山は、中国山地にございます。平安期に阿弥陀信仰と地藏信仰の霊場となりまして、それから修験の道場となっております。

石鎚山は、四国愛媛県にございます。熊野の修験にかかわりがあつたとされるところでございます。

英彦山は、福岡県と大分県の両県にまたがっております。明治の神仏分離令で英彦山の修験道は大変衰退しましたけれども、信仰圏は大変広いところがございます。

このように北から南まで行きましたが、北海道、沖縄はどうなのかともうしますと、北海道は先住民でありますアイヌの方々が、山と申しますよりも山の恵みといえますか、山そのものを生活に密着した自然の宝庫ととらえますので、樹木や動植物、水、岩などのすべてが神である。アイヌ語で、「カムイ」という呼び方をしております。

沖縄は、山よりも森を聖地と考えまして、御嶽と書きましてオタケ、あるいはウタキと呼びます。同じように樹木や岩等に神が宿るとしておりまして、偶像は持たない信仰が現在も続いております。

次に山岳信仰の歴史的な背景について、ご説明をさせていただきます。日本の国土の六十%以上が山地を占めます。山は水を蓄えますので水資源に感謝し、水分神を祭って農耕文化が栄えました。山は里に恵みを享受してくれる聖地であり、それとともに祖先の霊が静まる霊地でもあつたとされております。

そのような自然の恵みをもたらしてくれる山、すなわち生活の根源にかかわる聖地に人が安易に足を踏み入れることはタブーであり、大変恐れ多いことであつたわけです。干ばつの時には雨乞い祈祷もされました。アマガエルのことを雨乞虫と言って、祈りを捧げたという事例もございます。

そういった聖地、山ではありますけれども、仏教伝来によりまして浄土信仰が入ってきました。この浄土信仰とあいまって、山の稜線はこの世とあの世、すなわち此岸と彼岸の境界線とみなされ、密教の影響もそこに加わり、山岳修験者の修行の場として開かれていきました。また、日本特有の神仏習合の宗教観念も修験道とともに形成されていきました。

山の神は春に山から里に下り、秋の収穫後に里から山に帰るとされ、山麓に神を迎える神社が建てられ、豊穰を祈る春祭り、新穀に感謝を捧げる秋祭りが行われ、神道がそこから形成されていったわけでございます。

飛鳥・奈良時代には、中国からの渡来人によりまして道教が持ち込まれました。そして、山岳修行が始まりました。一方、鎮護国家を祈る仏教が取り入れられ、山で修行する僧が出現しました。修行者は山から下りると、呪術的な宗教活動を展開して、平安時代に最澄、空海の両師が全国に山岳の寺院を建立されていきました。

平安中期以降に末法思想が広がり、末法思想が強まる中で吉野や熊野詣が盛んに行われるようになりました。山岳修行を積み、呪術を行う行者を修験者や山伏と呼ぶようになり、山伏というのは山にこもって伏せて修行するということから山伏と言われるわけです。役小角を開祖とした、密教、道教、仏教の修行を取り入れた修験道がつくり上げられていきました。

江戸時代になりまして、講が結成されました。しかし、明治に神道の国教化を図るため、明治元年に神仏分離令、明治五年に修験道廃止令が出されました。修験道は衰退し、富士講や御嶽講、その他いろいろありますけれども、どの道を選ぶかということで、富士講、御嶽講は神道教団を結成したわけです。そして、この教派神道としての現在があります。

次に、社会構造の多様化に伴う信仰形態の順応性について触れたいと思います。科学技術が進歩し、交通網も発達し、通信網や医療の進歩、あるいは生活文化の向上がありまして、時代の流れとともに自然の恩恵への感謝が薄れてまいりました。山を神聖なる場所とするところから、レジャーの対象物とする傾向が見られるようになってきたのが現代でございます。

一方、科学の進歩とは別に自然に対する畏敬、自然への回帰、特に昨今のストレス社会や機械に左右される日々を振り返ったとき、大自然に身を置き、自己を見つめ直し、人間の回復を求めるきざしも出てきております。山を俗世間から解放された聖なる場所ととらえる影響かと思われれます。

登拝は昔からの、われわれ信仰者は白装束に身をくるみまして、とは申しますけれども、時代の流れもございまして、地下足袋を履かずに白いスニーカーを履いたり、あるいは地下足袋でもガス入りの、いわゆるエアーマックス調の地下足袋も出されておりますので、そういうものを付けたりします。また、夜の登山は明かりが要りますのでLEDの懐中電灯を使うとか、時代の流れの中に便利なものを使っておりますが、白装束に身をくるみまして、講の一員として参加しますのは、一人で登るのとは違い、励ましや助けあい、激励の言葉を繰り返しながら、祈りを捧げて懺悔反省、さんげさんげ、六根清浄といった境地になってくるわけでございます。これが、信仰者の現在のかたちでございます。

一方、信仰とは別に山ガール、山ボーイと呼ばれるカラフルなファッションで登山をされる方も多くなってまいりました。山の澄みきった空気、信仰では空気とは言わずに「神気」「靈気」と呼びますが、こういう澄みきった空気や靈気に触れまして、また山頂でこ来光を拝したとき、お参りしたときには、信仰とは別に人としての感謝の心が芽生えてきているのは事実です。そして、自然に合掌している姿をよく見かけます。そういうった観点から考えますと、宗教者としてさらに広い見識と豊かな心を持って、そういう方と触れ合いをさせていただく心を醸成することが、またそういう導きが大切であろうと考えております。

次に、私どもの御嶽信仰と霊神信仰について触れさせていただきます。木曾御嶽山は長野県と岐阜県の両県に位置しております。信州木曾御嶽山、三、〇六七メートルでございます。

ます。特に江戸時代は、山に一般の者は入ることができませんでした。これは、尾張大納言家が所領としてこの木曾地方を治めておりました。木曾のヒノキを保護するという意味から、山に入って木を切るようになってはいけないということから、一切認めなかつたわけです。特定の人にかなり厳しい潔斎をして、許可を得た者でなければ登れないとされていきました。例えば、木曾のヒノキの枝を一本落としたら腕が一本飛ぶ。枝一本、腕一本。木一本、首一つということも残っております。また、許可を得た者が木を切る場合でも、絶対のこぎりを使ってはいけない。斧で切り倒すということが通説でございました。斧は大きな音を立てますので、木を倒していることがすぐに分かるわけです。そういった厳しいところでした。

江戸時代の後期に尾張の覚明という行者と、秩父の普寛という行者が大衆運動と申しますか、一般の人も軽潔斎で登れるようにしようということで開山されたのが、今から二百二十年ほど前のことでございます。そこには艱難辛苦のご苦労があつたわけですが、でも、現在御嶽山の登山が許され、そして、御嶽信仰が発展していったわけでございます。

明治初年に御嶽講は約一万三千ほど全国にあつたと言われておりますけれども、もちろん二人三人でも一つの講でございましたので、そういう講を幾つかまとめて明治十五年に御嶽教が独立しました。

山岳信仰の特徴であるかも分かりませんが、われわれの場合につきましては天寿を全うすれば魂は御嶽に還る。そして、次のいのちの再生を待つという信仰の教えがございます。それゆえに山の麓、中腹までにかけて、たくさん霊神碑が建っております。この霊神碑は、墓ではありません。遺骨は一切入っておりません。霊神として、山に戻つたという考え方でございます。また、後ほどこの教派の紹介のときにスライドで出るかと思いますが、この霊神信仰は御嶽教の特徴であると思っております。

次に体験宗教と未来観について触れさせていただきます。御嶽に登拝するには、ロープウェイは中腹までがございますけれども、どうしても自分の足で登らなければなりません。あるとき、全盲の方が多くのボランティアの助けを受けながら登っておられました。大変、感動したわけです。この山は三、〇六七メートルありますので、健脚でも上りは大体三、四時間、下りは三時間かかります。ゆっくりお参りをしながら登れば、上りだけで四時間五時間ですから、往復で七時間八時間かかります。どうしても、自分の足で歩かなければならない。こういったときに、当然苦しさも出てくるわけです。講としての支え合いがそこで出てくるわけですが、便利な生活に慣れきつた現代社会ではやや敬遠される面も否めなйтと思ひます。しかし、このような時代だからこそもう一度原点に立ち返って、自己に向き合う、そして耐えるということを学ぶ。これが大切ではないかと思ひます。

我慢、あるいは辛抱、精進、努力といったことは大切なことですが、やや時代の流れとともに死語になりつつあるのではなからうかと思ひます。こういった欠如が、大なり小なり犯罪の一因となっていることは否めないことだと思ひますし、明るい社会づくりや豊かな精神生活を養うためには、こういった体験宗教を通じた、実践行を通じた信仰も大

切ではないかと思えます。

二十一世紀は精神社会と言われまして久しくなっておりますけれども、複雑な人間関係からストレスが積もって正常な判断ができずに陰にこもることも多くなってまいりました。よき相談者がなければ、取り返しのつかない行動を起こしてしまうことも見受けられます。個人の見解ではありませんけれども、相談者の苦しみも喜びもある程度共有できる対話が必要でありましょう。共に語らい、共に悩み、共に喜び、共に祈り、共に活路を見いだして、共に人生を歩んでいく。こういったことが、私は大切ではなからうかと思っております。

将来を展望いたしましたときに、環境破壊と保護、核開発と廃絶、物質の豊かさに反比例して精神の乏しさ等々表裏一体でありますとか、天地陰陽の順逆の感もいたします。

言葉ではいろいろありますけれども、世界平和を願いながら人が人として幸せに暮らすことができるように、信仰を持つ者としてなさねばならないことをよくよく考え、できることから取り組んでまいりたいと考えております。ご清聴ありがとうございます。

司会 村鳥先生、有難うございました。

【ディスカッション】

司会 続いて、基調講演をいただきました井上順孝教授をコーディネーターと致しまして、芳村正徳神習教教主、村鳥邦夫御嶽教管長のお二方をパネリストと致しまして、お三方でディスカッションをして頂きます。

これより司会進行をコーディネーターの井上先生に引き継がせていただきます。井上先生、よろしくお願い致します。

井上 それでは、早速討論に入りたいと思えます。それぞれ日々の活動を踏まえてのお話で大変興味深く聞かせていただきました。最初に二点ほどお聞きして、話を広げていきたいと思えます。

一つは、芳村先生のお話では、パワースポットとか婚活とか、それぞれの悩みで来られる方をといたことでしたし、村鳥先生は山ガール、山ボーイということでした。この、いわば許容性というところが非常に緩やかなところがいいと思うんですが、どこまで許容できるのかとなると、ときに困るといふ問題もあると思うんです。つまり、いろいろなかたちで訪れてくる、あるいは山に登ってこられる。そういうときに、たとえば自分たちは「NO」と言いたいとか、あるいはその時点で論すなりしたいと思っていることがあるかどうかをお伺いしたいのです。

もう一点は、そうやって入り口まで来られた人々とさらに一步深く関わるといふときには、何かあるのかということ。一般的な言い方をされて、それぞれの、例えば神葬祭であれば死者の御霊の行方についてお話をされる、あるいは結婚式は結婚式の意義ということ。山に登る場合には、耐えることを学ぶということがあったと思うのです。自分

の教派の理念なり、あるいはもっと広く神道的な教えでもよろしいのですが、次のステツプとして、こういうことも考えているということがありましたら、それぞれに言っていたかどうかありがたいと思います。芳村先生、お願いします。

芳村 今のところ、私どものところにパワースポットとか婚活であるとか、そういうかたちで見えた方で困ったことをされるといことはあまりないですね。ただし、私のところも宗施設でございますので、宗施設でやってはいけないという常識をわきまえてもらわなければ困ると思っています。

本来私どもの感覚では、神社にお参りするときはある程度きちんとした格好をするものですが、サングラスに裸足という方もいらっしやって、そういう方にはなかなか注意しづらいのが現実でございます。ただ、困るといのはその程度のことでございます。二度と来ないでほしいということはあまりないです。先ほどいろいろな要望を聞く、応えてあげるといことをお話ししましたけれども、皆さんの悩みというのは千差万別です。例えば、親御さんの介護に対する悩みといっても一緒くたにはできないわけです。それぞれの事情があつて、それぞれの背景がある。ご祭儀をする際に何々祈願というかたちでご祭儀を行います。その前、後に実際にどういふふうなことがあつて、どういふふう悩んでいるのかということをお茶を出しながら聞いてさしあげることになるべくするように心がけております。

そういうことを通して、神社と人ではなく、神社に勤める私たち、神職と人というところでごく信頼関係が出来上がってくるように思えるんです。面倒くさい、ほかの仕事に邪魔と言わずに、何しろちょっとしたときにお茶を出して、もちろん中にはなかなか帰ってくださらない方もいらっしやいます。そういった方はある程度時間を区切って、まず話を聞くことが重要だと思います。

私の経歴としては、高校を出てすぐに國學院大學に入ったわけではなく、会社勤めをしていたんです。会社勤めをして、教育の担当をしていたんですけれども、そこでやっていたことはやっぱり従業員の心の悩みをどうやって和らげていくか。それに関係する仕事をしていたんです。もちろん、ほかにも仕事をしていたんですが、そういうことから國學院大學に入つて、井上先生のご指導を仰いで、いろいろな先生方のご指導もいただき、その後で駒澤大学にも行っているんです。駒澤大学に何をしに行つたかというところ、カウンスリングです。お祭りだけをしたりということではなく、その人の人生のもっと深い部分でかわつていかなければいけない。カウンスリングは西洋のやり方かもしれないですけども、そこには勉強すべき点もたくさんありました。二年ぐらい通つて、カウンスリングや、これはうちでは面倒見切れない。申し訳ないですけども、病院に行かれたほうがいいのではないかという、ある程度判断がつくようにということでも勉強しました。

まず、人の話をちゃんと聞くということ。聞くことから、その方とのつながりが深くなつていくと思っております。接点というのは、今申し上げたようなご相談から、結婚式から

ご葬儀から、いろいろななかたちがあるわけです。そこで重要なのは、祭儀をやった人間、または白い着物を着た私たちとお参りに来た受け手との関係に尽きると思います。そこに心の交流がないと、関係性が発展していきません。恐らく、昔から僧侶や宗教の世界に身を置いていた方はそういうことをきちっとやってきたと思うんです。今、こういう時代だからこそ、そういう部分でも原点に返って、宗教者として人々の横にしっかり立って、支えていくという覚悟を持ってやっていかなければいけないと思います。

次のステップに関しましては、具体的にこれだというものはないんです。どういうかたちであれ、神社であれ、仏教であれ、キリスト教であれ、そこには人と人とのつながりが生まれるわけでございますので、これを発展させていく以外にないと思うんですね。そこで信頼関係、「この人がおっしゃっていることを信じてみよう」と気持ちになっていただいて、そこからだと思います。それには、根気よく取り組んでいくしかないと考えております。

井上 ありがとうございます。村鳥先生、お願いします。

村鳥 まず、許容範囲と申しますか、ここのところを山岳宗教的に考えますと、山を登りますときに山ガール、あるいは山ボーイ、またはレジャーの方が大変軽装で登ることがございます。こういったことにつきましての規制と申しますのは、行政とのタイアップも必要ですけれども、われわれは必ず先達がいるわけでございます。その先達は一人だけではなく、必ず講で団体で登ります場合につきましては、先頭と最後のしんがりと、中ほどこに、人数によりますけれども、数名ずつ配置しております。

基本は、一人でも多くの方が安全に頂上まで登れるように導いていく。それはスピードを争うものではないということに進んでいるわけです。信仰と関係のないと言いますか、レジャーで見えた方につきましては思い思いの装束で、また思い思いのスピードで上がってまいります。そういったしますと、三、〇〇〇メートル級の山ですので高山病にかかる場合があります。特に、昨今のように、経費を節約するために宿泊をせずに夜通し車で走ってきて、そのまま登る。睡眠不足の中で登りますと、必ずといっていいほど高山病にかかってしまいます。途中で上にも行くこともできない、下にも行くことができない。その場で止まっておりますと寒くなつて震えがくるという状況があります。あちこちに山小屋があるわけではございませんので、そういうことも含めまして、われわれが登っていますとそういう方を助けるといっておこがましいのですけれども、ご祈祷したり、あるいは背中をさすってあげたり、またそれぞれが持っているカップや服を着せて寒さを抑えながら、誰かが下まで付き添いでいくということもよくございます。

そういうことはあるのですけれども、それはいのちを救うという意味におきまして、また人助けをするという意味におきまして、これは大切なことであろう。これも一つの信仰の道だろうということで、そのようなことを進めているわけです。そのようにして助けられた方につきましては、必ず感謝にみえるわけです。別にそれを初めから頭に置いてしている

わけではないのですけれども、そのようなことをしております。

もうひとつ大切なことは、途中でレジャーの方も会うわけですから、登る勇氣も必要であれば、下る勇氣も必要である。その的確な判断をしてくださいということで、途中からそういった方に、「無理しなくて、このまま下りたほうがいいですよ」という指導をしたりします。また、頂上まで行きたいという方につきましては、「一緒に付いてきてください」ということで一緒に、講の一員をして、もちろん装束は違っていても構いませんけれども、そのようなことをやっております。

そういった繰り返しでもありますし、また個々のケースがあるかと思っております。行政とタイアップしながら、また天気予報も見なければいけない。地震等の観測もしなければいけない。最近では山の頂上まで携帯電話が通じるようになりましたので、こういう便利なものを利用しながらいろいろと情報をとらえて進めているところです。

次のステップと申しますか、これもこうしたいからいいということではなく、一つは以前から信仰は転ばぬ先の杖と言われることがございます。しかし、いくら信仰していても転ぶときはあるのです。転んで、怪我をするときもある。そのときに、信仰者はすぐ助けて常備薬になる必要があるでしょう。また、倒れた方を、特に山だとおぶって下ることもあります。この信仰者は絶対倒れない、絶対に転ばないということではなく、転んだときにどうするか。これは、人生やりなおしが効くという教えに付けております。

もう一つは、いのちの大切さについていつも触れております。これは私どもが、また私ども以外の方もそうかも分かりませんが、山を登るときに金剛杖をつくことがあります。そのときに、錫杖を付けます。御嶽信仰の錫杖と申しますのは、六つの金属の輪がついています。この六つは、昔からの仏教からの流れであろうと思えますけれども、六波羅蜜でございます。布施、精進、忍辱、持戒、禪定、智慧の六つでございます。このものを付けて登ります。

一歩ずつ足を進めますときに杖をつきますと、チャリンという音がいたします。この音は、今から修行で山に登るから、この前に歩いている虫を気がつかずに踏んで殺してしまうかもしれない。一寸の虫にも五分の魂がありますけれども、いのちあるものを殺生したくない修行のときに、「どうぞ、道をあけてくれ」という合図とも言われています。

そういったことも含めまして、多くの方にいのちの尊さを説いていくことは宗教者の最大のテーマであろうと考えております。震災で無念の死を遂げられました方、あるいはそれ以外にもいろいろなかたちでいのちを亡くされておられる方もあります。事件や、事故に巻き込まれたということもあります。その慰霊、御霊慰めをさせていただく、仏教では供養と申します。そして遺族の方とどう向き合うかということも含めまして、そして、若者の自死でございます。このことについても、山岳信仰の立場からのいのちの尊さ、一寸の虫にもというところからの話をしながら、教えを説いていきたいと思っております。教えを説くのも、教派神道の一つの大きなテーマであろうと思っております。

井上 お二方とも、対面状況の中での関係の重要性、実際に自分がそれにかかわることの大切さをおっしゃったように思います。

同時に、今の社会は情報化も進みます。必ずしも皆さんが本部まででかけたり、あるいは山に登れるわけでもない。お年の方もいらっしやいますし、身体的にハンディのある方もいらっしやる。逆に、文明の利器と申しますか、こういう情報時代になったので、そういうものも少しは活用して、今おっしゃったような理念や目標を伝えていきたいという側面も生じているかと思えます。その辺についてのご見解を、お二人にお聞きできればと思います。

芳村 情報機器が、世の中に反乱しております。高齢の方も携帯電話を持つようになりまして、一家に一台という、パソコンも普及しております。そういう中で、私どもは二〇〇二年にホームページを開きました。今、ホームページは当たり前のものです。ホームページがないと、「ここは、本当に実態があるのか」という疑いの目を向けられてしまう時代になってきました。私どもがホームページをつくるに当たって、看板のような、情報がそこに羅列してあるようなウェブサイトで面白味に欠けるので、相互でやりとりができるようなものはないかということで工夫してつくりました。

それが二〇〇二年ですので、もう十年経っているわけです。少し古いと言いますか、専門家からも、「今、こういうのはあまりない」と言われまして、ちょうどリニールで新しいウェブサイトをつくっているところですよ。ウェブサイトを見る方は、例えば自分たちが作りたいウェブサイトは流行やいろいろなものがあるのかもしれませんが、まず欲しい情報にダイレクトに行くというウェブサイトを欲しているということを開きまして、今そういうものをつくっております。

私の手元にもPhoneが置いていますが、これは時計代わりです。腕時計をあまりしないのです。今このPhoneやスマートフォンを持つ方が非常に増えております。このスマートフォンを使つてのアプリというものも作っております。内容的には、一般的な神道というものにより多くの方に触れていただけるようなものをつくることで、私どもの布教は取りあえず二の次にしまして、一般的なより多くの方にふれていただけるようなアプリをつくらないかということで、今八割方できています。

こういう時代になりますと、何しろいろいろな情報が氾濫しておりますけれども、逆に情報を流していないと駄目ですね。受け手が何を選ぶかというのは自由になってきますので、そこで受け手の感性に合うものをいかにして流すかということが、今の時代には重要ではないかと思えます。これはまだやっていないのですけれども、YouTubeというメディアもありますので、これも使っていかなければいけないと思っております。

私どもが放送局を使って情報を流すとなりますと、これは莫大なお金がかかります。しかし、YouTubeとか、子供たちはニコニコ動画をいつも見ておりますが、そういったものを使いますと、ホームビデオ一つとコンピューターが一台あれば、自分たちが流したい映像

を流せるわけです。それが日本だけではなく、世界中の人が目にすることができるわけです。ここで良い、またはしつかりした情報を流すことは、宗教者として重要なことではないか、やらなければいけないことだと考えて、いろいろ取り組みをしております。以上です。

村鳥 私どももホームページ等々もしておりますけれども、ご年配の方はどうしても苦手と言われる方が多いと思います。中には目がご不自由な方、あるいは耳がご不自由という障害を持たれている方がおられるわけでございます。

例えば高齢で御嶽山に来ることができないときに、どうしたものかという考えましたときに昔の講の集まり、現在は教会とか布教所と言っておりますけれども、そこに皆さん方がそれぞれに集まっていたいただいて、そこで話をしたり、映像を見聞きして共に仲間同士が語り合い、分からないところは仲間同士が説明し合う、それが教会布教者の繁栄にもつながっていくと考えております。

そういったところからDVDや資料をつくり、そういったものを使って、いろいろな立場や年齢の方々にも理解していただきやすい、そういう多角的なと申しますか、いろいろな方法を駆使していく必要があると思つて、今少しずつ進めている段階でございます。

井上 情報化の問題は、時間があれば講演でもう少し付け加えたかったですけれども、今回は時間が非常に短かったのでカットしました。芳村先生は、かなり積極的に取り組んでということですね。iPhoneなどを見ておりますと、この中でどのぐらい使っているのか分からないんですけれども、若い方はごく普通に用いています。持っていないほうが肩身が狭いというふうになつてまいりましたね。これで電話やネットを見るといいこともありますが、いろいろなアプリケーションがあります。私は非常に興味深いと思つて調べたんです。例えばキリスト教関係は、聖書の英語と日本語の両方が対訳になっているアプリが複数無料で見れます。イスラムのコーランのアプリも、何種類かあります。アラビア語と日本語の対訳、あるいは英訳したものもあります。

それをつくった人は、おそらく「自分たちの教典を知ってほしい」ということだろうと思います。では、日本の仏教はどうか。私が見つけたのは、今のところは般若心経だけです。短いお経。その後、また何かがあるかも知れませんが、神道はないと思いますね。

こういう時代はホームページというのも一つですが、自分たちが大事であると思つて自分を自分たちでつくつて、誰でもいいから見てくださいということが長い時間にとつての緩やかな影響になると思うんですね。そういう観点から、例えば五年十年、これから情報化もどう展開するか分かりません。そういう中で、今はこうだけでも、将来はこういうことも視野に入りたいということがございましたら、おっしゃつてくださるとありがたいと思います。

今まではホームページとか、質問があつたときに答えるというインターネットの双方向性を生かしたものが多かつたわけです。iPhoneのアプリなどは、例えば聖書でいえどにか

くみんなに見てほしいということをやっていると思うんです。そうすると、信者になるかどうかということは全く別にして、聖書になじむ人は増えますね。そういう広い意味での、例えば教派神道にとってこういうことを皆さんにベーシックに理解しておいてもらったらいいのではないかということもあると思うんですね。そういう観点からの、例えば将来こういうことがあったらいいのではないかという情報内容ということですよ。

芳村 教派神道としましては、一番の問題は教派神道という神道系の教派があることを知らない方が非常に多いということですよ。まず、それを知っていただくということの情報発信は絶対に必要だと思います。これは教派神道連合会という団体がありますので、そういうところからやっていくのか、または各教団が独自にやっていくのかは分かりませんが、でも、まず先生が先ほどの講演の中で、成立の背景などのいろいろなお話をされましたけれども、ああいうお話を一般の方に分かりやすくした状態で発信することは、今非常に大事だと思います。

教派神道の各派は百三十年、またはそれ以上前から一生懸命信仰しながら人々の教化をやってきております。これはまがいものでもありませんし、薄っぺらいものでもありません。先人たちがしつかりつくり上げてきたものです。こういう教派があつて、こういう活動してこういう教義があるということは何らかのかたちで社会に浸透させるには、言葉や方法を選んでいろいろ工夫が必要ですけども、まず情報を自分たちから積極的に発信していくことが重要ではないかと思えます。発信するに当たっては、ちょうど情報機器の話が出ましたけれども、紙媒体に限らず、使えるものはできる限りのものを使うということになると思います。

先ほど iPhone というお話をしましたけれども、先生はコーランや聖書はありますというお話をされました。ホテルに行けば、聖書が置いてあつたりするわけです。しかし、神道に関する神典は置いてはいません。ホテルに置くには、やっぱりお金がかかるけれども、iPhone は制作にいくらかのお金や手間はかかりますけれども、興味がある人はそこにアクセスして自分たちでダウンロードしていきます。今、私たちが考えているのは、先ほど自分たちの布教活動はさておきと申しましたとおり、大祓詞といったことから皆さんに知っていただきたいと思つて、そういうものもアプリの中に入れようと思つています。

このご祭神のご神徳は何か。皆さん、日常生活で何か困つたことがあつたら、「どうしよう。神社にご祈願に行こうか」と思うわけですね。そのときに、一歩踏み込んで病気のときはこういう神様、旅行の前にはこういう神様、そういう神様をお祭りしてあるところはどういうところかということが分かるようなアプリをつくれなにか。それも無料で。今、そういうことを考えています。

YouTube に関しても、例えば手水のやり方、実際に着物を着た人間が大祓詞を唱えているとか、正式に参拝しているところを載せて、いいかたちでの垣根を下げることをやっていきたいと考えております。

村鳥 私も、ほぼ同じでございます。先ほど井上先生がおっしゃられましたように、「般若心経は載っている」というお話でした。般若心経は、多くの方が知っている、また自分で唱えられるわけでございます。神仏関係なしに神の御前で宝の御経、仏の御前で花御経と言われることでございます。

しかし、神道はと申しますと、先ほど芳村先生もおっしゃられましたように祓詞ですとか、それも身禊の祓、大祓から六根清浄の祓、いろいろな祓詞があるわけです。こういったことについての、ある意味直訳的なことは載っていると思うのです。現代の社会に置き換えて考えたときに、それをどう解釈するかということもあるわけです。そこに具体的に、多くの方が悩んでおられるようなことを一つの引き合いに出しながら、その解釈のもとに「こういう方法がある」という教えもそこに加えていくことができれば、面白いのではないかと思っております。

多くの方がこの宗教団体に対して敷居が高いと思っておられるようなことであれば、まずそこを低くする努力をしながら、気軽に相談する、また安心して相談できるといったことも同時に流していく必要があるのではないかと思っております。

井上 ありがとうございます。将来、これから情報環境はどうなるか分かりませぬし、そもそも社会自体がどうなるかも分かりませぬ。われわれ研究者もそういう中で、自分の研究している視点が正しいかどうかを絶えず反省するわけです。宗教関係者の方は、それがすぐに生きざまにかかわるといって大変厳しい状況にあると思います。

今日のお話が非常に参考になった方もいらっしゃると思います。特に情報化、ちよつと前には神社検定というのがあって、非常に参加者も多かったようですが、Phoneで教派検定を無料つくってもいいわけです。そういう時代になりました、柔軟な発想も一方では求められます。一方では、人間の生命や尊厳、死の問題というベーシックなことにもかかわっていく役割があると思います。

時間も来まして、うまくコーディネートができたか分かりませんが、貴重なお話をうかがえてよかったですと思っております。どうもありがとうございます。

【閉会】

司会 先生方、本日は大変素晴らしいお話を有難うございました。

皆様方はまだまだお話をお聴きになりたいとは存じますが、残念ながらお時間でございます。コーディネーターの井上順孝教授、パネリストであります芳村正徳神習教教主、村鳥邦夫御嶽教管長のお三方にあらためて盛大な拍手をお願い致します。

以上をもちまして「神道六教派特立百三十年記念事業 公開シンポジウム 二十一世紀の教派神道」を終了致します。有難うございました。